

あとがき

まだ予定の半分も書き終わっていないのに、このノートのあとがきを書くことにした。あるときふと、このノートの目標というか、目的というか、そういうものとしてぼんやりと意識していたことが、ふと言語化できた気がしたからだ。

——家サルバドール・ダリが20代の頃、大嫌いだった建築家ル・コルビュジェと昼食で同席する機会があった。そのとき、コルビュジェはダリに、「これからの建築はどうなると思うか、君の意見を聞かせてもらえないかね」と訊ねた。ダリはすかさず、「やわらかくて毛深いものになるだろう」と答えた。住宅を「住む機械」とまで喩えたコルビュジェである。彼はダリの答えに、苦虫を嘔み潰したような顔をしたという。¹

さて私も同じことを、数学で予言したいと思う：

「これからの数学はもっと、『やわらかいもの』になるだろう。」

しかしその具体的な意味は、おそらくダリ自身がそうであったように、よくわからない。あくまで感覚的なものだ。

ダリが主張したのは、建築の構造が「やわらかいもの」になるという意味ではない。建築が「人間にとって、やわらかい」ものになるのだ。

数学も、その論理的厳密性や構造主義的性格が「やわらかく」緩んでしまうことは決して無いだろう。しかし、われわれが数学に接するときに生じる感覚が、無機的で硬質なものから、はるかに有機的で「やわらかい」ものになるだろう。少なくとも、数学を理解する際のインターフェイスとして、記号や論理以外の別の要素が重要視される日がおとずれる。その別の要素とは、他ならぬ、人間という存在である。あいまいで、間違いやすく、信頼のおけない、人間という存在である。

ただし、数学が「毛深く」なるかはわからない。数学の「やわらかさ」に付随して、装飾的で、ときには不快でもあるような要素が生み出されるかもしれない。

私のこのノートも、いまある数学者諸氏にとっては、すでに十分「毛深い」ものかもしれないが。

¹うろ覚えだったのでネットで調べたところ、次のような文章を見つけた。出典はよくわからない：When I was barely twenty-one years old, I happened to be having lunch one day ... in the company of the masochistic and Protestant architect Le Corbusier who, as everyone knows, is the inventor of the architecture of self-punishment. Le Corbusier asked me if I had any ideas on the future of his art. Yes, I had. I have ideas on everything, as a matter of fact. I answered him that architecture would become “ soft and hairy. ” ... In listening to me, Le Corbusier had the expression of one swallowing gall.